

自然共生河川研究所(岐阜分室)だより

岐阜分室研究第三部次長 梅谷内 信夫

河川を管理していくためには、さまざまな知識が必要となります。特に最近では多自然型川づくりということで、生態関係の知識が必要になってきています。そのため生態関係の研究会、講演会等が数多く開かれており、これは必要なことでありますが、最終的には河川の安全性と生態系の保全とをどこで折合いをつけるのか、また、消失した生態系をどのようにして創出するかが非常に大切になってきます。それには、洪水の力が堤防なり低水路にどのように働くのか、高水敷上の流れはどのようにになっているのかという基礎的な部分についてもっと勉強していくことが大切となります。

特に最近になって河道特性の成立要素と、その因子である年最大流量、河床材料の代表粒径、河床勾配の関係が明らかになってきておりますし、洪水時の主流路と低水路との関係や水防林と低水路法線のあり方などもだいぶ明らかになってきているようで、これらについて現場の一線で管理に携わっている職員が、知識を吸収していくことが大切であると思います。

そこで岐阜分室では中部地方建設局の若手職員を対象にして、河川工学に係わる基礎的なところを勉強していこうということで、平成8年から河川勉強会を開いています。今回は1月29日に実施しました第4回の研究会についての概要を報告します。

今回の講師は河道内の水理特性と樹木との関係を研究されています、広島大学工学部の福岡捷二教授にお願いしました。

内容の要点は、

①今の植樹基準は厳しすぎて河川内に植樹はほとんどできないが、水理的特性からもう少し木の植え方、場所など理論的に整理し、積極的に植ええられる材料を出していくべきである。

②低水路満杯ぐらいが一番流速が早くなるので、低水路護岸はその時の最大流速で設計すればよい。

③洪水時に、高水敷に水がのっている時間が長く、且つ深いとき（相対水深が2～3割より上のとき）河道形状と低水路形状との関係で低水路内側に最大流速がでることがある。

④洪水後を見ると外岸が深く掘れているが、洪水ピーク時で内岸に最大流速が発生しているときは、内岸が掘られている。

⑤樹木を水防林として残す方法の1つとして、樹木に水制の機能を与えるため、E型に残して実験中である。

等の内容でしたが、中部地方の河川でも実現象をよく観察し、よりよい川づくりを進めていくため、今後共勉強会を続けていきたいと考えています。



講演中の福岡教授

リバーフロント整備センター 岐阜分室
〒500 岐阜市司町1番地岐阜総合庁舎1階

TEL 058 (264) 8151 FAX 6757

次 長 梅谷内 信 夫
主任研究員 鈴木 金 治
主 事 鷲 見 昌 子